

2019.6.8

第11回名大郷土研究会 OB 会総会イベント

～ 美濃路、清洲宿を行く～

案内人 柴田

- 1 日時 2019年6月8日(土) 13:00～16:45
- 2 場所 総見院、清洲古城跡公園、清洲城、清洲公園、上畠神社、
本陣跡、清涼寺、日吉神社、正覚寺、一里塚、長谷院
- 3 踏査コース(約6km)

① JR清洲駅 スタート 13:00 (改札口 12:45 集合)

② 総見院へ 13:10 (清洲駅から10分) 約10分

総見院は、清洲城主時代の織田信雄の父信長の菩提寺として、桑名大嶋の安国寺を引き取り、総見寺を建てたのが始まり。清洲越で名古屋大須に移った後、1644年、総見寺第三代和尚の隠居場所を兼ねて、尾張藩徳川義直が清洲の旧地に総見院として立てさせたものである。信長、信雄、義直の位牌を祭る。「本能寺の変」直後に、信雄が探し当てたという信長着用の「焼兜」が保存されている。

③ 清洲古城跡公園へ 13:50 (総見院から30分) 約5分

清洲古城跡公園には、清洲城本丸跡がある。ここには、「清洲城碑」のほか、「右大臣織田信長公古城址碑」と「清洲古城跡公園お社」がある。毎年6月2日の信長公の命日には、このお社で「織田信長公顕彰祭」が行われる。

④ 清洲ふるさとの館(休憩) 約10分

⑤ 清洲城へ 14:07 (ふるさとの館から2分) 約30分

清洲城は、室町時代応永12年(1405)、尾張国の守護職であった斯波義重が、守護所であった下津城(稲沢市)の別郭として建てられたのが始まりと言われている。弘治元年(1555)に信長が那古野城から入城、尾張を統一掌握したころの清洲城の基本構造は、守護の館と同じだったと考えられている。永禄3年(1560)の桶狭間の戦いに勝利した信長は、ここから天下統一への第一歩を踏み出した。「本能寺の変」で斃れた信長の跡目を決める「清洲会議」の後、城主となった次男信雄によって改修された城郭は、天守を備え、東西1.6km、南北2.8kmにも及び、あらゆる機能を備えた城塞都市として過去最大の規模に達した。その後の城主は、織田家から豊臣秀次、福島正則と移り、関ヶ原の戦いでは、東軍の最前線の城と

して重要な軍事拠点となる。関ヶ原以後、城の主は松平忠吉（家康四男）、徳川義直（家康九男）と変遷した。この頃の清洲城下は、人口6万人を数える賑わいを見せ、朝鮮通信使の記録にも「関東の巨鎮」と称され、天下の名城と讃えられた。慶長15年（1610）徳川家康は、清洲城廃城と名古屋城築城を命じ、町の建物、町の機能全てが移転する「清洲越」が行われた。これにより尾張の政治・経済の中心は清洲から名古屋に移り、清洲城とともにその城下町は歴史から姿を消し去った。名古屋城築城に際しては、清洲城の資材が再利用され、特に名古屋城西北隅櫓は、「清洲櫓」とも呼ばれ清洲城天守の古材で作られたと言われている。平成元年（1989）、四百年近くの年月を経て歴史ある城が「清洲城」として天守閣をはじめ、芸能文化館、清洲城広場などをしたがえ、地域のシンボル、平成のお城として甦った。

⑥ 清洲公園へ 14:39（清洲城から2分） 約5分

清洲公園には、桶狭間の戦いに出陣する姿を模した「信長公銅像」と、その脇には「濃姫像」がある。

⑦ 上畠神社へ 14:49（清洲公園から5分） 約5分

「清洲越」以前からの大社として格式高く清須三社の一つ。伊勢神宮の御厨があったとされる清洲公園辺りの上畠の地に勧請され、のちに斯波氏の築城か、織田信雄の城域拡大を機に、城の鎮護として現在地に移したと言われている。

⑧ 清洲宿本陣跡へ 14:57（上畠神社から3分） 約3分

「清洲越」により、いったん衰退した清洲であったが、元和2年（1616）に清洲宿が再び設けられたことで活気を取り戻した。美濃路は東海道「宮宿」から中山道「垂井宿」をつなぐ重要な脇往還で参勤交代の大名や朝鮮通信使も通行した。「清洲宿」は、本陣・脇本陣・旅籠屋が置かれ大変賑わった。旧本陣（高松館）は明治24年（1891）の濃尾地震で焼失し、唯一残った本陣正門のみがやや縮小され現存している。

⑨ 清涼寺へ 15:02（本陣跡から2分） 約5分

美濃路沿いにある「曾洞宗洪福山清涼寺」付近は、かつての宿場「清洲宿」の中心地にあり、山門上層の鐘つき堂からは清洲宿内に時を告げていた。

⑩ 日吉神社へ 15:27（清涼寺から20分） 約10分

「日吉神社」は、「上畠神社」、「御園神明社」とともに清須三社と呼ばれ、尾張藩の下で格式高く扱われ清洲城下の氏神としてあがめられている。尾張で生まれたといわれる豊臣秀吉は、清洲町朝日の出身である生母（大政所）が日吉神社に祈願し授けられた神の子であり、それゆえに幼名を「日

吉丸」といい、身のこなしが当神社の神の使いである猿に似ていたと伝えられている。江戸幕府を開いた徳川家康は、小牧長久手の合戦のおり、織田信雄の軍勢とともに清州に野営した。その際、軍兵が当神社を焼き払った。戦いの後、信雄は神社の本殿、末社を造営し、その後家康の四男松平忠吉が清州城主となり、日吉神社を大々的に造営修復、社領を寄進した。忠吉は弓術を好み射札を度々奉納している。神社の西側には当時の弓場の跡が今も残っている。

⑪ 正覚寺へ 15:52 (日吉神社から 15 分)

約 10 分

「正覚寺」は、慶長 8 年 (1603) に清州城主松平忠吉が実母西郷局 (宝台院) の菩提を弔うために武蔵国忍 (元埼玉県行田市) から浄土宗満誉玄道上人を開山に迎え、須ヶ口外町に堂宇を建立した。慶長 15 年 (1610) に始まる「清州越」で当寺は忠吉の法名から大雄山性高院と改名して名古屋に移され、忠吉の菩提寺となった。一方、その後すぐ清州の旧地にも、旧名のままで再建されたのが当寺で、宝台院の菩提、性高院の霊牌、忠吉に殉じた四名の家臣の位牌を護る由緒ある寺院としてこの地に続いてきた。この寺には、忠吉ゆかりの宝物のほか、忠吉母子の供養塔、仏足石、桶狭間の戦いで倒れた今川義元に関わる「今川塚供養碑」(2007 年移設)、がある。

⑫ 一里塚 16:07 (正覚寺から 5 分)

約 2 分

⑬ 長谷 (ちょうこく) 院 16:22 (一里塚から 13 分)

約 10 分

「堀江の観音さん」と親しまれる「長谷院」は、14 世紀頃、奈良長谷寺の本尊十一面観音への熱烈な信仰から、この地生まれた真言宗「新長谷寺」が始まり、奈良・長谷寺本尊と同木同作という十一面観音像を本尊とする。小牧長久手の兵火で堂宇を失ったが、焼失を免れた本尊は、「清州越」により名古屋南寺町に移転していた浄土宗阿弥陀寺の一角に、慶長 18 年 (1613) 移された。そのため浄土宗に改宗し「園宗院」と称した。承応 3 年 (1654) 寺名は「堀江山長谷院」に戻ったが、元文 3 年 (1738) の大火で、本寺の「阿弥陀寺」もろとも焼失、この時も本尊は無事であった。二度の大火をくぐり抜けた十一面観音への人々の信仰は高まっていった。天保 3 年 (1832) ここ西堀江の人々の熱い願いから、この地に戻るようになった。天保 5 年 (1834) に第十代尾張藩主斉朝の寄進により、「多宝塔」と「仁王門」が建立された。軒丸瓦には、尾張徳川家の三葉葵の紋がある。

⑭ 名鉄須ヶ口駅へ到着 16:39 (長谷院から 7 分)

⑮ 総会会場へ移動